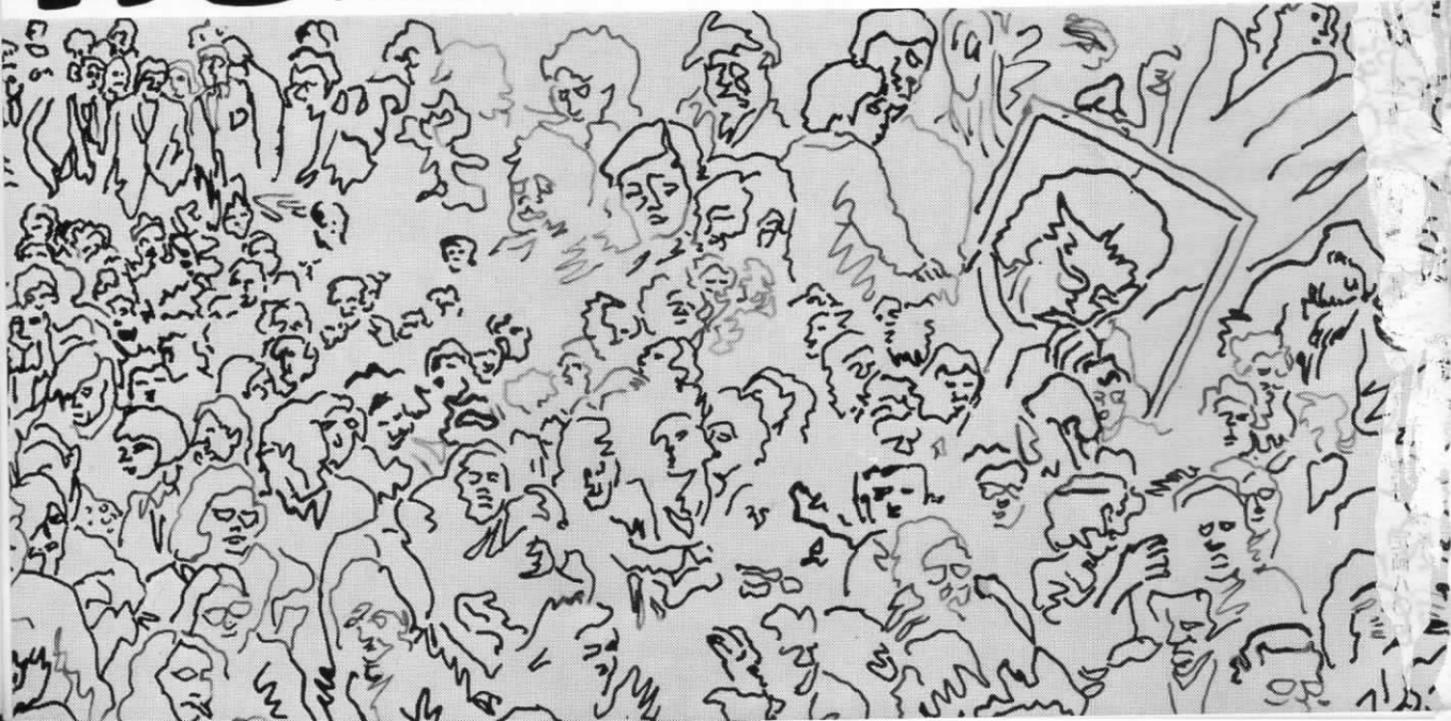


# 乱

RAN ⑥  
麦社通信

コミュニオンと《祭り》——藤川 健 郎  
大企業労働運動の思想的立脚点——柚木 義 典  
アナキズム運動抄史（一）——相沢 尚 夫



# クロポトキン

パンフレット・シリーズ(全5冊)

第一集 青年に訴う 大杉 栄訳

第二集 革命の研究 大杉 栄 訳

第三集 法律と強権 石川三四郎 訳

第四集 代議制度 石川三四郎 訳

第五集 革命政府 大沢正道 訳

■ 表社 取扱

(定価各 ¥50 円35)

# 反国家と

# 自由の思想

いま、ぼくは住みなれた「アナキズム」の地平から、  
ぼく自身の必然の世界へと飛翔する滑走路に入っている。  
——へはしがきより

〈内容〉序章／ぼく自身のためのマニフェスト I／転形  
する革命思想 II／社会主義における自由の復権 III  
／古典的革命観からの解放 IV／組織論の革命 V／  
国家—権力による最高形態

★四六判函入二三頁

価八〇〇円

大沢正道

川島書店

〒160 東京都新宿区柏木1-6-1  
振替東京34102 Tel. 371-5935

# コミュニオンと祭り

— パリ・コミュニオンの今日的意義 —

藤川健郎

今また、あの空疎で巨大な儀式が行なわれようとしている。支配を支配として、権力を権力として、被支配—被抑圧階級に確認させ、幻想としての国家を主体として演出するためのあの最大の儀式、じつは、すべての政治をブルジョア政治の枠内におしとどめるものでしかない国家に向けての参議院選挙がそれである。六月二六日現在、つまり、私がこの文章を書いているいま、まだ街には国会へゲリラをのポスターが立ちならんでいる。国会へゲリラを現出せしめうるとして、それがゲリラとしていかなる意味を有しているのか、あるいはまた、国会へゲリラをというスローガンのもとに、当選することを第一義として運動を展開する（少なくとも、選挙公報で知りえたかぎりではそうらしい）ということが、運動として何ほどの意味を有しているのだろうか。

ここでは直接にそれ自身の評価について詳細に検討するつもりはない。ただ、それがパリ・コミュニオンによって正当化されてきた過程を見ると、われわれにとつてコミュニオンとは何であるのか、そして、その原型を呈示したパリ・コミュニオンの意義とは何であったのかは、飽くことなく確認され続けねばならないと考える。

抑圧され、搾取されてきた労働者市民が、その血でかろうじて獲得することのできるかに見えたコミュニオン、一八七一年のパリ・コミュニオンは、その百周年を迎えた今日、ブルジョア政治最高最大の儀式—参院選での得票数増大の正当化の歴史的根拠として、『赤旗』によって喧伝されたばかりでなく国会へゲリラを送りこむことを正当化するための根拠ともされてきている。はたして、パリ・コミュニオンの意義は、そのようなものだろうか。

否、そうではあるまい。むしろ、パリ・コミューンの志向は、そして、すべての  
 コミューンへの志向は、そうしたものは、まったく正反対の極に位置するもので  
 あるだろうと思われる。私は以下に、マルクス主義者アンリ・ルフェーブルを援用  
 しつつ、若干のパリ・コミューンへの視点を提示してみたい。

## 1

パリ・コミューンについて日本語で読みうる書物は、少なくはないとはいえ、ま  
 だまだ充分であるとはいえないだろう。そうしたなかで、H・ルフェーブルの『パ  
 リ・コミューン』は、著者自身が日本語版序文で述べているように「一定の独自性  
 をもつもの」として、それなりの評価と読みこみが必要だと思われるものである。  
 その一定の独自性とは、著者に従えば、彼の、マルクス主義を実践概念として把  
 えて分析を行うという方法論だろうが、著者の意はさておき、われわれが評価すべ  
 き独自性とは、そうした彼の方法論によって提示されているもの全体革命への幾  
 つかのキイ・ワードⅡによって構築されている、と見なければなるまい。

H・ルフェーブルは、マルクス主義者ではあるが、それを、実践概念としておさ  
 えることよって、《マルクス主義》の歴史解釈主義とは異なる極に立っている。  
 『パリ・コミューン』においても、はじめの二章（「コミューンのスタイル」「マル  
 クス主義的实践概念・歴史学と社会学・全体史に向って」）において、彼の方法論  
 を明示し、他の章においては、トロツキーなど、他のマルクス主義者をも含む、パ  
 リ・コミューンの歴史解釈主義を批判する。対置されるのは、《歴史的实践》とし  
 てのパリ・コミューンへの、歴史Ⅱ社会学的方法によるマルクス主義的アプローチ  
 である。肝心のところを、エンゲルスやレーニンに依拠してしまうことも含めての  
 マルクス主義的限界はあるにせよ、《実践》を検討することによって得られた革命  
 へのキイ・ワードは、独自のであると同時に重要性を有すると考えられる。

そのキイ・ワードとは、私の読み方では、次の通りである。すなわち、

《祭り》——自然発生性および日常性と疎外の諸問題。

《連合原理》——パリ・コミューン唯一のイデオロギー的原理である連合原理と  
 自己管理、そしてプロレタリア独裁をめぐる諸問題。

そして、もう一つをつけ加えるならば、

《都市》——資本主義とそのプロレタリアの形成、および資本主義的行政と日常

疎外の諸問題。

これらの、当然にも相互不可分なキイ・ワードは、著者が**全体的な自然発生性**を重視しているバリ・コミュニンのなかで重要であるだけでなく、現代における自己的全的な解放即ち自己権力の奪還と確立を志向する全体革命においても、見落してはならない重要性を有しているものと考えられる。

## 2

「コミュニンは自然発生的に生じた」「都市とプロレタリアートにおける歴史的・社会的条件を伴った根源的な自然発生性が：国家、官僚制、諸制度、死滅した文化といった幾世紀にもわたって積み重ねられてきた沈澱物を押しつける」として自然発生性を重視する著者は、「自然発生性なしには：いかなる革命理論も大衆の中に浸透して政治力となることができない」と明確に指摘する。だが彼はまた、自然発生性の限界を指摘することも忘れてはいない。「それら（国家・常備軍・既存の諸制度）を廃止しさえすれば、人々は一気に、新しい生活、永遠の自由の祭りのなかに移れるであろう。パリの人民はそれ以上に速く政治思想のなかへは入らないし、入ることもできない」というのがそうである。このことを「非難する権利をもたない」と認めながらも、革命を革命たらしめるためには「あるイデオロギーが、自然発生的な運動に目標を与えなければならぬ」とルフェーブルは述べる。そして、彼によって検討されたバリ・コミュニン当時のイデオロギーのうちで、「コミュニン唯一のイデオロギー」と彼が結論したもの、それが連合原理である。

## 3

「バリ・コミュニンにおいて：政治上の計画を提出する唯一のイデオロギーは連合主義であり：一八七〇〜七一年において、誰れがブルードンを援用しなかっただろうか」と書いている著者が「根源的な革命計画として、すなわち既存の社会を、自由な結合体の自由な結合に変える地方分権と連合主義の計画としての、ブルードン主義のイデオロギーを強調」しなければならぬのは、彼が、再三にわたって他のマルクス主義者を批判しながらも、正当に主張しているように「バリ・コミュニンの経験によってマルクス主義ははじめて完成された」からだという、マルクス主義そのものの未完成のためだけでなく、「(ブルードン主義の)計画はやはり全体

的なものであり、刺激的で生き生きとしていた。それは一つの可能性を示すものであった」ためだと考えられるだろう。

「フランスにおける中央集権化と国家主義化の憂慮すべき性格を誰れが理解していたか。ジャコバン派か。否。マルクス主義者か。否。…ただブルードン主義者のみが何ものかを理解し、プログラムを構想した」「プログラムを示すことによつて、パリが地方へ呼びかけ、労働者が農民に呼びかけることを…可能にしたのはブルードンの教理のみであった」「地方都市への呼びかけと連合主義のプログラムは、苦難の叫びや政治戦略とは別箇に重大な影響力をもつものであった」。

このように書く著者のブルードン主義への評価、すなわち、連合・分権・自己管理への評価は特記するに価するものだろうが、そこには同時にマルクス主義的限界があることも見落してはならないだろう。たとえば、一八七一年二月二四日の国民衛兵共和主義連合の規約に關し、彼は次のように書いている。「この規約は）コミューンが実現しようと試みるだろう独自の政治的組織の原型を提供する。すなわち連合主義、直接民主主義の強調を伴う民主的集権主義である」。民主的集権主義は、レーニンをまつまでもなく民主的独裁、プロレタリア独裁へと直接移行する。

マルクスがコミューンから得た最初の教訓を、「それはプロレタリアート独裁の理論であり、したがつてまた、この民主的独裁のなかにおける国家消滅の理論である」とする著者は、この定式に疑義を發することはない。それは、「ブルードン、サンシモン、バクーン等の思想も…マルクス主義も…国家の終末という最終目的において一致する。…が、しかし…彼らはマルクスが新しい国家、すなわち本質的に死滅しつゝある国家をうち立てるべき時期として正確に規定したところのプロレタリア独裁の歴史的時期をとびこえる」（傍点筆者）と述べていることから明らかであるわけだが、このことから、ルフェーブルの連合主義への理解は、おそらく、**「プロ独」**と両立しうるものとしての連合であるらしく思われる。

彼のそのような発想は、たとえばスターリニズムによる**「マルクス主義の歪曲」**といった現実の規定されて、そのような**「歪曲」**を排除するために、マルクス主義のなかにブルードンの要素をとり入れねばならない、と考えていることを示しているようである。以下の文章は、そのことをもっと明らかにしてくれている。

「社会主義の大国においても…資本主義の大国においても認められる行政的・政治的非集権化の一般的・世界的要求…それについての最初の徴候をコミューンのイ

デオロギーと実践のなかに示すことができる」「資本の集中と蓄積が、地方分権と連合主義の原理に、新たな―具体的・実際の―意味を与えている。…そのみが、未開発の国や地域が支配され搾取されることなしに経済の大きな単位に加入することを可能ならしめる。…明日のヨーロッパは地方分権化されるだろう。そうでなければ堪えがたく権威主義的となり、経済的、社会的、政治的に受け入れられないものとなる」また「コミュニンの人々は、既存の国家を破壊し…直接に衰滅を約束している新しい国家をつくろうと欲した」(レーニン)のだが「革命運動は世界的な規模でつづけられたが…しばしばコミュニンの人々が試みたのとは正反対のことを行つた…二十世紀の革命運動は、巨大な国家、広大で強力な政治的装置を創造し、また創造しつづけている。」

このように書く著者にとつては、連合原理は、 $\wedge$ マルクス主義 $\vee$ の歪曲を避けるための $\wedge$ プロ独 $\vee$ の補完物であるらしい。それゆえに「コミュニンの偉大な理念、マルクス主義者たちが排斥することのできないこの理念(各委員会に結集した市民による生産と分配の直接的・民主的管理)は、これを最初に提起したブルードン主義と切り離すことはできない」と評価されている自己管理も $\wedge$ マルクス主義的地方分権計画 $\vee$ を支えるための「コミュニンや地域的に限られた区画とは別に、自己管理と自由連合の基礎としての生産単位 $\parallel$ 企業を作り出す」ものとして認められているのだと考えられる。

このように、マルクス主義者である著者にとつては、過渡期における $\wedge$ プロ独 $\vee$ そのものへの疑義はなく、ただそれを補完するものとしての連合・分権・自己管理が強調されている。だから彼の見たバリ・コミュニンの社会構造は次のようなものである。「プロレタリア独裁、すなわち武装した人民の民主的権力は、ここでは国家的構造一般の計画的、意識的かつコントロールされた破壊と切り離せない。それに代わるものは、古い国家のように社会の上に建てられた集権化された新国家の機構ではない。実際、それはその時、 $\wedge$ 可能事 $\vee$ 、すなわち国家的・官僚的・軍事的・警察的装置の大部分を軽減した一つの社会的実践なのである」。

## 4

自然発生性から出発してその一方の軸、イデオロギーとしての連合原理を一応見てきたので、ここでもう一方の軸 $\wedge$ 祭り $\vee$ の検討をしなければならぬが、その前

に著者が『パリ・コミューン』においては暗示的にしか語っていない（都市）について簡単に触れておく。なぜなら、ルフェーブルが（祭り）という時、それは農村と対立しつつ発展してきた（都市）における祭りの存在の様式が問題だと思われるからである。

資本主義は、必然的にプロレタリアートを形成すると同時に（都市）を形成し、その都市の中でプロレタリアート人民を日常的に疎外するという構造を持ち、都市は、その疎外を回復させる機能として、広場や祭りを持つと共に、資本主義的行政（経済的不平等の隠蔽のための立法権・警察権を含む）の高度に合理化されたものとしての（都市）となつて、より一層人民を疎外するものとなつてきている――とするのがルフェーブルの都市論であるらしい。

『パリ・コミューン』においても都市論者としての彼の見解は各所に見られるが、特にパリという都市でのプロレタリアの形成を重視したこと、地方コミューンの発生地も都市であること、（首都としてのパリ）の独自性とそのイメージの指摘、ボナパルティズムと関連して述べられている農民とプロレタリアの関係の指摘等がそうしたものの例としてあげられる。ここでは、その各々について見るより、同じルフェーブルの『都市への権利』の中の次の一節を見た方が、彼がパリ・コミューンに見出した（都市）の姿が明らかになると思われる。

「パリ・コミューンの意味の一つは、場末の周辺へと投げ返されていた労働者達が都市の中心へと大挙して帰来したことであり、彼らから奪い取られていた財貨のなかの財貨であり価値であり作品である『都市』を再び征服したことであつた」。

## 5

パリ・コミューンとは何か？ この間にルフェーブルは次の様に答えている。

「それはこの世紀と現代における最大の祭りであつた」「それはまず巨大で雄大な祭りであつた。フランス人民と人民一般の精髓であり象徴であるパリの人民が、自分自身を捧げ、かつ世界に示した一つの祭りであつた。…財産を奪われたものとプロレタリアの祭り、革命的祭りであるとともに大革命の祭り、現代のもっとも大きな全体的祭りであつた。…一八七一年三月一八日の事件は…根源的諸力を傷つけることなく支配していた受動性とあきらめの破壊をなしとげる。…それはまさに祭りであり…華やかに整然たる儀式と祭礼をもつ長い祭りである」。

『パリ・コミューン』の冒頭において、ルフェーブルは、その方法論を提示する  
 とき、パリ・コミューンの分析においては△スタイル▽が重要であることをマルク  
 スを援用しつつ主張し、「創作であると同時に行為であるコミューン」のスタイル  
 を「フランスの政治的・社会的生活は演劇的（ドラマ的）スタイルである」とする  
 マルクスをふまえて、「コミューンの固有のスタイルは『祭り』のスタイルであつ  
 た」と定義している。

彼によれば、パリ・コミューンが志向したものは、「政治の用語や、国家と政治  
 の終末を越えて、コミューンは、もつと遠く、またもつとも身近な、もつとも广大  
 で、またもつとも直接的な目的を提起する。すなわち（日々の）生活が終りなき祭  
 りへと転換し、それ自体、無限に後退する死の宿命以外には、なんらの限界も限度  
 ももない喜びへと転換することである」とされており、そのようなコミューンⅡ  
 その祭りの過程Ⅱにおいて見られるのは「根源的な意志、世界と、現にある生活  
 と、現にある事物を変える意志であり、もつとも高い思想をもたらす自然発生性で  
 あり、全体的革命の企てである。熱狂的で全般的な『すべてか無か』である。可能  
 性と不可能への、生死にかかわる絶対的な賭けである」のであり、そうした「終る  
 ことのない大きな祭りのなかで：遊戯となった自由な労働が現われる」のだと述べ  
 ている。

では一体△祭り▽とは何であり、何故に希求されるのだろうか。彼はそのことに  
 簡単に答えている。「彼ら（貧乏人）に欠けているものは空間よりも時間である。  
 彼らは狭い家に住み、あわただしく食事をとる。だからこそ突如として時間と空間  
 を解放する祭りが、彼らにとつてあれほどの重要性を持つのではないだろうか。組  
 織され商業化された『余暇』が未だに存在しない時期において、祭りは世間への労  
 働生活の華麗な解放である」。

『都市への権利』によれば、祭りとは「快楽や幻惑以外の利益なしに、物資や金  
 銭…を非生産的に消費するもの」であるという。そしてそのような非生産的消費こ  
 そが、都市における疎外を回復するものであるとされており、『パリ・コミュー  
 ン』における「街頭やカフェや祭りは貧乏人の社会空間を構成する」といった指摘  
 とともに、都市における祭りの重要性を示していると考えられる。

革命のキイ・ワードとして△祭り▽を考えるということは、ルフェーブルに限つ  
 たことではない。革命の社会学的考察である『革命と反革命』（アンドレ・ドクフ

レ著、白水社版文庫クセジュ)においても、革命時の民衆の行動および態度の三つの基本的特徴を、警戒とお祭り気分と暴力であるとの指摘が自然発生性との関連の上でなされている。ともあれ、ルフェーブルが大衆の自然発生的蜂起を祭りと規定し、その祭りを大都市との関係において述べていることは注目すべきであろう。ハバリ・コミュニケーションとは祭りとある√との指摘こそが、彼の『バリ・コミュニケーション』中最も重視すべき点ではないだろうか。祭りと、大衆的・社会的沸騰としての行為としてだけではなく、資本主義的な(或いは権威主義的な)日常的空間と都市とその時間からの解放として捉えたということ、すなわち疎外からの全的回復への視点として祭りとというキイ・ワードを提示したことが重要なのである。

### おわりに

日本においても、六〇年安保を祭りと見ることはあった。埴谷雄高(『民主主義の神話』現代思潮社、六二年)や、渡辺武信(「エスプリ」一号、六三年)などの指摘がそうであり、また埴谷の「安保闘争は祭典であった」との指摘をうけた形での谷川健一(「現代の眼」六九年十二月)とその谷川を援用した平岡正明(「現代の眼」七〇年二月)など、そして、明確にルフェーブルの影響下にある津村喬(「構造」七〇年五月)あたりが、祭りが革命のキイ・ワードとしていかなる意味を有しているのかを考察している(なお彼らとは逆に、祭りに否定的評価しか与えていない高知聡も革命と祭りの関係を考察した一人としてあげられるだろう)。

平岡におけるハレとケの指摘、津村が柳田国男にならってであろう、祭りと祭礼とを弁別してきていることなどは、日常性と非日常性の織りなす都市と資本主義空間・時間の中で、権力が溢出しようとするエネルギーをどのように抑圧し転化させるのかを見る場合に、一定の視点を獲得していくための参考になるだろう。

そのことはさておき、バリ・コミュニケーションは、また現代の工業化され高度に資本主義行政網の発達している都市における大衆的叛乱は、自己の全的解放を志向するものとして、祭りの相貌を持つていることは疑いをいれまい。それは、「国会ヘゲリラを」として集中され代理される解放への希求のではなく、真に自己のものとしての解放にむけてのエネルギーの燃焼であるのだ。バリ・コミュニケーションの意義を再確認するとは、まさにそうした、何ものによっても代理されえない解放への志向をとらえなおすということではないのだろうか。

# 大企業労働運動の思想的立脚点

柚木 峻

## 一、はじめに

もう何年もの間、 $\wedge$ 私 $\vee$ を主語として語ることを忌避してきた。短い生涯ながら、既にいくつか経験した敗北の記録によって、韜晦の姿勢の安全さを覚えてしまったのである。だが、本論の主題は私のそうした卑劣な態度を許さない類のものがある。

私は大企業労働運動からの「逃亡兵」である。大企業従業員たる安逸さに身をまかせて、資本の論理に日々精神をむしばまれていたよりは「積極的逃亡」の方がより人間的な行為だと、現在でも確信は揺がないけれども、「逃亡兵」という客観的事実のつきつける罪悪感には消えそうにもない。とりわけ、依然として闘い続ける「現役兵」に思いをはせる時、負い目は一層強くなる。

こうした人間のなしうる事は、自己の体験をいくばくかでも論理化し、「かたれば」としてそれを企業外の闘う人々に伝承し、両者の間隙をうめ合せることしかない。それを必要としているほど、大企業と中小企業労働運動の質的相違は大きい。しかも、一般的には労働運動論は中小企業労働運動の体験をもとにしていることが多い。他方、大企業労働運動は、最も先進的部分でさえも、せいぜい企業内の極点的反抗運動に終わるか、従業員運動という閉鎖性にとじ込まっている。両者ともに異和感とセクト性にとられ、このことが日本の労働者の階級的連帯を阻害している労働者側の条件となっている。まことに、労働運動の当面する困難性は、資本側条件のみによるのではなく、労働者の側にこそ多くの発生的条件を負っている、といわねばならない。

こうした客観的条件をふまえるならば、私の試みも、あながち無益でもなから

う。私自身もまた、この試みを繰り返すことよって「現役兵」との実践的連帯が形成されるかもしれないという予感を抱いている。とはいえ、私の能力の程度は、実践への処方箋を模索しながらも、それをいまだ明示しえぬままに、とりあえず問題の所在の提示するに止まっていることを自覚せねばなるまい。

## 二、大企業の労務管理と労働者

大企業労働者にとつての最大の難敵は、実は、資本にはなく、自己内の「欲求志向性」にあるといつてよい。大企業労働者の日々の生活はそれほど劇的なものではない。中小企業労働者が、しばしば「オヤジ」と喧嘩をしたり、労働条件の切下げや解雇、倒産失業に直面して資本の狂暴さを身をもって知る機会があるのにくらべ、大企業労働者が資本の「息吹き」を知ることとは比較的少ない。中小企業の労務管理が「弱者の強腰」であつて、経営側から喧嘩をしかけてくることが多いのに対して、大企業の労務管理は「強者の二枚腰」ほどの違いをもっており、減多に目立った抗争の種はまいてこない。彼らは要するに労働者とその企業に長期に在籍し続け、特定企業従業員としての有利さを感じるようにさえなれば、それによつて労務管理の最大の成果をあげる自信をもっている。労務管理の質はけつして露わに暴力的なものではなく、むしろ適度に温情的、親和的で、時には「人間味豊かな」擬態をとることもある。一皮むけば、狂暴な資本の論理を秘めながら、表面的には従業員の不満など、いとも簡単に懐柔する「包容力」をもった管理方法である。一言でいえば、「企業共同体」の構造が、気味悪い物わりの良さを性質とする「柔構造」になっている。

だが、この「柔構造」論にはいくつかの註釈が必要である。第一に、従業員の層別反応形態についてである。こうした「柔構造」にすべての労働者が包摂されてしまつているわけではない。神経をビリビリと緊張させて闘い続けている極少の「反抗者」が存在することは事実である。彼らに対しては経営の「柔構造」の特質の一面である「ムチ政策」が容赦なく打ちおろされる。「柔構造」とは「アメとムチ政策」を内容としており、その本質をひきはがそうとする者には遠慮なく弾圧が加えられるが、そうでない者には「アメ政策」が施されるからである。多くの場合、真の闘争者はまるでイエから勘当されるように、企業から放逐される。「いかにすれば合法的に解雇できるか」というテーマの日経連主催の講習会が満員の盛況を呈したの

は既に十年も昔のことである。今や企業はその手法をすっかりマスターしている。放逐されるほどの闘いを組まない「批判者」には「自主退職」に追いこむべく画策される。昭年四十六年五月一日付神戸新聞には某大企業がいかんにして批判者を追い出そうとはかったかを示す「某社公安資料」を掲載している。それによると、批判者を「職場共同体」の中で「職場八分」処分として孤立させ、「自主退職」に追いこもうとしている。たとえば、一緒に通勤しないように同僚を説得すること、慰安旅行で列車の座席や宴会の席次を年配者と並べること、同僚に話をしないように命令することなど。一見些細にみえるが、批判者の目の前で部・課長が当人以外の全員に「酒を飲みにいこう」と誘うというような陰湿な弾圧方法に面して、胸につきささるような巨大企業の中の孤立感、不安感に襲われないですむ人間はそう多くはない。彼らは「自主退職」であるが故に、他のサイレント・マジョリティに問題をつきつける契機も持たず、むしろ「あいつは忍耐がない」と後指をさされて去っていくのが落ちである。

他の労働者は大むね経営価値と経営規範の「受容者」である。象徴的にいえば、企業から放逐されない限りは、企業にとって容認可能な従順な従業員と見なされていると考えてよいし、そのような存在であると自己規定してもまちがってはいない。この層が圧倒的多数を占めることはいうまでもない。従って自己の生き方にとっても、労働運動にとっても、この層がいかに「運動者」に転化するかの可能性の方向を検討することが重要となる。本論もそれを主題としている。

「受容者」として、もちろん、経営のいいなりになっているわけではない。資本の限らない価値増殖過程で犠牲となるのは彼らであり、国際競争の激化、労働力不足を直接的契機として、最近ますます目立っている労働強化のもとで呻吟しているのも事実である。そこから必然的にさまざまな不満も発生している。時には、衝動的に「反抗形態」をとることもある。また、経営価値・規範に対して無関心という「静かな反抗」形態が広範になっていることも既に述べた（「乱」2号）。

だが、そのいずれも、それだけでは、新たな価値創造者とはいえない。経営価値・規範に対抗しうる階級的価値・規範を創造する志向性をもつ地点にまで自らを高めない限り（それは経営への「反抗者」となることであり、放逐を覚悟せねばならないのだが）、つまり、特定企業従業員であり続ける限り、その生活過程は経営価値・規範の受容過程である。

第二に、「柔構造」の内容についてである。多くの「受容者」をとらえている労務管理の質とは以下のようなものである。

まず、彼らは経営組織上の最小単位である作業組、又は係に統合される。このレベルでの労務管理のねらいは、組長又は係長を中心としてま・と・ま・り・を・良・く・す・る・こ・とに尽きる。組長、係長にはそれほど高度な管理能力が要求されているわけではない。彼らは所属従業員の企業内外での生活に目をくばり、「話のわかる監督者」でありさえすればよい。企業のように、目的合理的に管理機構が整備され、職場集団の集団目標も明確であり、全体的組織の中に職場集団がキチンとはめこまれていない場合には、全体的組織の動きに部分組織である職場集団がついてきさえすれば、職場集団の生産性は高まるという構造になっている。つまり、職場集団のま・と・ま・り・が良好ならば、経営のねらいは九割程度果たされたといつてよい。そこで、組長、係長の涙ぐましい奮闘が始まる。企業内生活では、日常的な作業遂行に関して技能を教え、体調を気づかい、休憩時間に一緒にお茶をのみ、雑談に興じる。企業外生活では、帰りに赤ちょうちんに部下を誘い、職場集団でボーリング、旅行に行き、冠婚葬祭の世話役をする。こうして企業内外の全生活過程において、職場集団の連帯がはかられる。おそらくは、こうした人間関係は人間の基本的欲求に根ざしているのだろう。誰しも、「腹をわった」全人格的交わりをしたいと願う。だが、この場合には経営の労務管理的意図に基づいているが故に、その成果は経営側に吸収される。新入社員がこの気風になじんでいく過程は、入社以前に彼らが潜在的にもつていた階級意識、生産者意識が、徐々に従業員意識に変化していく過程である。

こうして組・係などの「職場共同体」に統合された従業員は、さらに「部・課共同体」に統合され、「工場共同体」にも統合される。これらの共同体意識は、もっぱら競争意識によって醸成される。部・課単位毎の生産競争、技能競争などがあおりたてられ、レクリエーション活動までが部・課対抗競技大会である。部的結合を強めるべく打出された方策の典型は、松下電器の「事業部制」であろう。これは、「部」を工場的ま・と・ま・りの単位として、独立採算制をとり、「部」間の競争を強化しようとしたものである。「せりあわせて生産性をあげる」方式である。個別資本に分断された労働者が、さらに細分断され、相互に競うことから発する刺激によって労働の喜びを感じるしかないこと、その結果生ずる生産性向上の成果を経営がほくそ笑んで吸い上げること、などは悲劇的図である。

工場毎の競争も同様に行なわれ、「工場共同体意識」がさらに醸成される。

こうして種々の「共同体」にとりかこまれて、相互に分断された労働者が、最後にとりこまれるのが、「企業共同体」である。企業レベルでは、単に人間関係のみに基づいてま・と・ま・りの重要性を強調しても、労働者は納得するはずがない。それには当然、物質的裏付け、つ・ま・り、ま・と・ま・りを良くするような觀念に基づく労働条件が用意される。

それは次のような特徴をもっている。

第一に、雇用関係における終身雇用制である。一度雇用したら、定年退職まで面倒をみるという管理策は労働者に限りない安堵感を与える。この安堵感は同時に、もし経営に抵抗すれば放逐されるという恐怖感と裏腹の関係であることよって労働者の自主規制意識をよびおこす。自主規制意識さえ持っておれば安全なのだ。おとなしくさえしておれば、定年退職後も退職金の支給、傍系・下請企業への就職斡旋などの方法で一生涯面倒をみてくれるし、子供も優先的に採用される特典をもつ。

第二に、賃金制度における年功制である。ま・と・ま・りを良くするための企業内社会秩序は勤続年数による年功序列である。これは、とにかく企業に忠誠を誓っておれば、賃金額があがっていくという安心感を与えることになる。さらに、家族をも対象とした賃金体系(家族扶養的生活給)であるため、家族からも絶えず企業に反抗するなという有言無言の圧力が加わる。

第三に、生活保障としての企業内福利厚生制である。経営者は従業員の私生活に互って面倒をみようとする。これは、一面では日本の低賃金を隠蔽し、不況期になれば賃金を下げないでこれを切下げることによって、労働者の反抗をそらすことができる。他面では、家族をも含めた全生活過程に互って、至れり尽せりの世話をすることによって、企業帰属意識を涵養するねらいをもつ。実際、大企業労働者をして、文句はいうが本腰を入れた反抗ができなくさせているのは、この福利厚生制によることが大きい。

たとえば、一人の労働者の生活過程を例にとつて説明すれば、次のようになる。彼の最初の鬼門は結婚である。この時、彼は職場の上司に仲人を頼み、職場の主だった幹部をゴッソリ招待し、まるで企業のPRの場と化す。幹部からも企業からも祝金をもらい、時には会社の結婚式場で企業の一部費用負担のもとで挙式をする。彼が社長、部、課長を招待したがるのは、他の客に対する虚栄心以外の何ものでも

ない。続いて、どこに住むかの問題がある。これはためらいなく社宅を希望する。民間アパートの1DKに二万円に住む中小企業労働者とくらべて、2DK五百円の家賃の社宅住いを喜ぶようになれば、いよいよ「従業員意識」の完成が間近い。主婦には早速、物資の販売を行なう会社購売会の魅力が待っている。子供が誕生すれば出産祝金が企業から出る。会社経営の病院で安く出産ができる。病気になるれば見舞金、家を建てたいと思えば低利長期融資の住宅資金貸与、家族ぐるみレジャーを楽しむたいと思えば家族慰安会、運動会、観劇会、旅行の時は会社の保養施設を利用すれば便利で安い、子供が成長すれば育英資金、企業内学校等々。お歳暮として企業から支給された新巻鮭（金額にすれば二千元程度だが）を、家族の歓声を目に浮かべてであろう、踊り出さんばかりに喜々としてかかえて帰途につく某社の従業員の一群を見た記憶は今なお生々しい。

以上の記述を小括しよう。資本主義の競争原理は基本的には個別資本間競争である。この競争において個別資本利潤を増加しようとすれば、労働市場を個別資本毎に縦断する事が必要になる。労働組合が横断的労働市場の規制者として交渉力を強化すれば、それだけ賃金上昇を来し、利潤部分の減少を導くからである。もちろん資本総体にとっても、労働者の階級連帯が実現すればたまったものではない。資本のねらいは具体的には労働者階級意識に対して従業員意識を優先させるようにしむければ大成功である。その為に、上記のような労務管理策によって、その企業に定着させることをねらっている。定着さえすれば、いかに不満をもとうとも、二十年、三十年の間には自然に従業員意識は身につくのである。業なことではあるが、労働者のもつ生活安定欲求と社会認知欲求は現状では大企業に求める他ないことも事実である。結婚、出産という人生の二大転機に、彼らは大企業の従業員であることの利益をいやというほど知らされる。とくに、中小企業に働く労働者が自己の意識の中で比較の対象として想起された時、彼らは個別従業員利害の擁護の方向へ急速に傾斜していく。

彼らが、フト、「この会社も満更ではないな」と思った時、「いい会社にお勤めですね」といわれて、かすかな誇りを感じた時、襟に社章を光らせる時、「ウチの会社は……」と表現するような「うちわ」意識が生じた時、労務管理は完成の域に達する。大企業における労務管理とは、そのようなものである。私が最初に、大企業労働者の敵は八自分Vにあるといったのは、この意味においてである。

労働者階級にとって悲劇的であったのは、戦後の組合運動自身が、こうした個別従業員利害の擁護運動であったことである。敗戦直後の労働運動は第一次大戦前後、大企業において労働者階級分断策として定着した「経営家族主義」の結果もたらされた特定企業従業員の特殊の既得権益にしがみつき、せっかく訪れた天皇制国家イデオロギーの崩壊期——階級連帯を可能とする条件の発生——をわがものにならなかった。当時の労働運動の最先進部隊として闘った電産が掲げた有名な「電産型賃金」は、内容的には「経営家族主義型賃金体系」であった。この賃金闘争が、基本的には、個別従業員利害擁護運動であったが故に、電気資本は同じ「従業員のために」をスローガンとして立直り、第二組合にまた同じスローガンを掲げることによって、電産を崩壊させることができた。現在に至るまで、電気産業において、家族主義的労務管理と右翼的労働組合が、最も強く癒着している理由の一つはここに存する。

### 三、「突破」の方向性

こうした大企業の「柔構造」を「突破」する方向性はどこに求められるか。「突破」しない限り、日々、精神の頹廃が進むばかりである。それを自覚できるならまだしも、知らず知らずの内に、ゆるやかな坂道をころがり落ちるように、「なしくずし転向」は進行する。

私の論議は、大企業内部で組織的運動を行なおうとする人々にとっては、笑止千万のものであろう。彼らは、巧みに経営側をごまかしながら極秘裡に同志を獲得し、闘う拠点を構築すればよいというにちがいない。また、他方では、組合執行部を掌握し、労働条件向上の為に闘うべきだというだろ（堂々と「反戦」の部隊で闘うべきだとの意見も当然出てこようが、それは熾烈な弾圧に会って、一年ともたなかつたという事実をふまえて、私は議論している）。だが、前者が非合法、後者が合法的組織活動という相違はあれ、現状においては、大企業内部で組織的活動を行なえば、それは経営機能の補完物にしかならないことは、事実が証明している（乱々号拙稿参照）。組織的活動は個人の墮落をもたらす。既に述べたような労働者個人にとっての危機的状況（「自己の内なる敵」が存在する現在、組織的活動は個人が問題を正面からとらえることを回避させ、総もたれ状況をもたらすだけである）。

今こそ必要なことは、「自己の内なる敵」と個人として直面することである。この過程を経由しない限り、大企業労働運動の階級的蘇生はあり得ない。今や、あれやこれやの小手先の戦略・戦術論を放棄しよう。ではどうすればよいのか。誤解を恐れずいおう。それは「明日にも大企業を辞める覚悟を作る」ことである。平凡なこととはいいまい。もちろん、これは象徴的表現であるが、その意味は深い。別の表現をすれば、特定企業に生活安定欲求、社会的認知欲求の充足を求めず、それを自己の内に準備しよう、ということになる。とはいえ、現実には「明日にも辞める」覚悟と、それに代って自己を支える何かを自己の内に蓄積している大企業労働者はほとんど皆無に近いが故に、このスローガンは象徴的効果をもつ。

大企業の中にとどまって闘うという論理は人の採用しやすいものである。だが、その論理のもつ偽善性は既に事実が証明している。大企業においては、ジックリと自己の拠点を築き、かつ「反資本の論理」を貫くことなど不可能であることは、当の労働者が一番よく知っている。問われているのは、神経をビリビリさせて、緊張感を自己の内におりたてながらも、なおかつ、日々襲ってくる資本の懐柔と脅迫に耐えきれず転落していく個人を支える論理と情念の基点は何か、である。ましてや、日々頹廢の度を深めながら、「生活の論理」(「オレには妻子がいる」)、「今は生活の都合上、仕方がない」など)で自己弁護をはかる者には、ほとんど真实性を見出しえない。大企業においては、ひとたび、精神の弛緩が始まれば、もう二度と態勢をたて直すような劇的な契機はめぐってくるものではない。「そのうちやり直そう」などとはいわぬがよい。それは偽善性の上塗りにすぎない。肩の力を抜けば、こんなにも居心地の良い世界はないのだ。

これを倫理主義、心情主義と批判する者にはいおう。労働運動も、もとはといえば人間の倫理的欲求から出発した。利潤の分け前論などは、後にくつつけた論理にすぎぬ。労働運動も労働者も、個人の倫理という原点から見つめ直すほかないほど、頹廢してしまつたのだ。

企業を辞めることを悪、辞めないことを善としてきた、従来の運動の価値感を今や転換すべき時に来たと思う。「辞める情念」を主体的に確立することが、臆首を恐れず闘う倫理と論理を作り出す前提条件となるだろう。

労働移動を可能とする客観的条件(労働力不足)は成熟しつつある。既に大企業に背を向ける動きもある。現在のところ、それは個人的利己主義にすぎないようで

はある。だが、その傾向が益々強くなれば、明治末年以来、六〇年に渡って形成されてきた大企業の労務管理は大きく動揺するだろう。それは、労働者は企業に「しがみつく」以外に生きる途を知らないのだという、尊大な、人間蔑視観に支えられて形成されてきたのだから、もうここらへんで、労働者の「人間宣言」があってもよいのだ。

今、私は、「タンポポ主義」の組織論、運動論を夢想している。闘い、誠首されても、「自分の内なる何ものか」を拠点として、次々と別の戦場へ飛んでいき、行くべきさきで新たな「タンポポ」を作り出すといったものを。問題は、飛んで行く内に風化してしまわない強固な拠点を自己の内に確立できるかどうかである。日本の大企業労働者が次々と闘いの場を求めて飛んでいけるようになった時、はじめて資本の呪縛はなれて、個別資本別分断から階級的連帯を形成する契機が生まれるといえよう。

## アナ連インターへ日本代表派遣

八月一日から四日間にわたってフランスで開かれる世界アナキスト大会に日本から、本多啓司氏（CSL）他一名（？）が参加する。（詳細は不明）  
大会の議事内容は次のようなものといわれる。

- 一、事務局活動報告
- 二、各国代表報告
- 三、社会的革命的アナキズムの理論的基礎、その現代世界への適用
- 四、資本主義と国家に対する闘争との関連
- 五、国際アナキズム運動の目的と手段
- 六、 $\wedge$ アナキスト連盟インター $\searrow$ 連合規約および財政
- 七、新事務局の任命
- 八、次期国際大会の期日

## 黒色青年連盟最後の大会

### アナキズム運動抄史（一）

相沢尚夫

無政府主義戦闘誌と銘打った（黒旗）の発行所である黒色戦線社を三鷹に移して、私共其処へ住み込んだのは一九三〇年の十二月であった。発行所には毎日誰かが訪ねて来て、時には泊って行く者もいた。ピカとかピカさんと呼んでいた山崎真道が一週間ほど泊り込んだのは年が明けて間もなくだった。彼はよく光る大きな目をしたやせこけた男だった。一癖ありげな美青年だったのである。彼は一九二六年の銀座事件の立役者だった。議会があわてふためいたこの事件のことは語ろうとしなかったが、ある日、私に話したのは、こうだった。

「黒連（黒色青年連盟）の演説会が忽ち解散になったので、みんなワァッと外へ出た。余り解散命令が早く出たので、癪に障っていたんだな。オレが黒旗を翻えし馳け出すと皆が、ワットついて来た。そして忽ち新橋を渡って銀座へ出た。別に銀座へデモする計画でも何でもなかったが。資生堂の近くまで行くと、もう人っ子一人いないんだな。いつもはしゃれた恰好で散歩してる奴等、みんな逃げちゃったんだ。おまわりが飛んで来て制止しようとするから、旗竿で殴って突き飛ばした。そして資生堂のショーウィンドを叩いたら割れたんだよ。したらみんなも片っぱしからショーウィンドを割っちゃったんだ。それで尾張町の近くまで行って、ひょいと見ると、誰もいないのさ。みんな早いところ逃げちまいやがった。見ると向うからおまわりの一隊が列をつくって馳けて来る。こりやまづいと思って旗竿を乗せて、旗をたたんで上衣の下にかくして、横丁へそれ廻り道して家へ帰って寝た。翌朝、まだ夜が明けるか明けないうちに、特高がワァと飛び込んで来て、がんじがらめに縛られて、引っぱられちゃったんだ。」

一九二六年の結成当初の黒連は大争議には必らず応援に馳けつけていた。労働運

動よりも革命闘争を主張するアナキストもいたが、それは分野の相違でアナキズム運動には変りはないと考えていた。山崎のように、大杉死後のテロリズムに深く感動してアナキズム運動に加わった人達は労働組合の運動を廻りくどく感ずるのは避けられなかった。けれども、未だ思想的対立が生れてはいなかった。それなのに、間もなくアナキズムとアナルコ・サンデカリズムは何故に激しく対立し、抗争するに至ったのであろうか。この抗争が頂天に達した時、黒色青年連盟は最後の大会を持った。一九二八年であった。この年には既にアナキズム運動は衰退の坂を降っていた。この年から、急坂となつてころげ落ちて行つたのであった。そして私の書こうとする会合は、正に自らを急坂に落した自殺行為の出発点であった。しかし誰もそのことに気付いてはいなかった。

衰退に向つたのは何故だろうか？

この会合のあつた年より三年前の一九二五年頃から、アナキズム運動の衰退が見えはじめたのであるが、大正デモクラシーは、普選法を成立させている。この法律は支配階級にとつては大きな譲歩と感じられた。しかしデモクラシーもまた国家であること、だから貴族、ブルジョア、大地主の支配を少しも揺がしはしないことは明かなことだつた。けれども彼等は普選法と同時に、治安維持法を成立させなくては安心できなかった。

普選法の要求が高まると、労働者階級は自分達の代表を議会に送れるという希望を持つようになつた。議会の多数派になれば、自分達の利益が確保されるに違いないと考えはじめた。無産政党や労働組合幹部の宣伝は、これに拍車をかけた。いつ達成できるか判らぬ革命を強調して、一切の政治運動に反対し、経済的直接行動を説くアナキズムよりも、少しでも毎日の生活が改善されるなら、それでいいではないかと大多数の労働者が考えたのも無理はなかつた。しかし未だ革命的労働者はアナキズムを棄てなかつた。

けれどもロシア革命と共産党の勝利から、政治的権力の獲得が、解放運動の正しい方法であるかのように、革命的労働者が考えたのも無理ではなかつた。ロシア革命が共産党によつて歪曲されたと主張したのは、大杉栄等少数のアナキストだけだつたが、一九二三年に彼が殺されると、もはや有力な反対論は展開されなかつた。誰よりも革命的労働者を魅了していた大杉の死はアナキズムには大きな打撃となつた。支配階級は安堵した。だから甘粕はすぐに出獄して、のちに満州国で大金持になつた。論功行賞だつたのである。

大杉は革命の戦略戦術論を展開しないうちに殺され、その後のアナキズムは、テロリズムと結びついているかのような印象を与えてしまった。支配階級の宣伝は、大衆の恐怖感をそそり立てた。アナキズムは社会主義運動の市民権さえ喪失しはじめた。

一九二八年、普選による第一回の総選挙が行われた。二七年テーゼによってコミンテルン日本支部として再建した日本共産党は豊富な資金と体系的な理論を持って活発な活動をはじめた。アナキズム系労働組合の闘士達にさえ焦燥感と共産党の理論が正しいのではなからうかという疑問が生まれるほどに猛烈な活動だった。政府は治安維持法によって共産党を弾圧したが、革命的労働者は三・一五、恨みの日……と歌いながら、共産党へ続々と移行した。そのなかにはアナルコ・サンヂカリストも含まれていた。こうしてアナキズムとアナルコ・サンヂカリズムの間に、裂け目が作られた。

アナキストはロシア革命の際、共産党がロシアの同志達に何をしたかを、投獄、流刑、はては暗殺したことを知っていた。だから、アナキストが激しい憎悪を共産党に向けたのも当然であった。アナルコ・サンヂカリストのなから共産党への転向者が現われると、憎悪は火のように燃えあがり、はてはアナルコ・サンヂカリズムへも疑いの目を向けた。そしてアナキズムからマルクス主義らしい一切を、用語のはてに至るまでも一掃しようとした。そして思想の純潔を守れと叫ばれた。思想はその純粋性を追求する必然性を持っている。しかしやがてこの追求は原理原則への固執に転化する。そして硬化し、発展を停止する。かくて遂に疑わしい人物は放逐しろとの叫びが上る。放逐は物理的にさえ行われた。階級闘争、それはボルダ。組織、それは権力だ。ボルダ。当時のアナキストにとって、ボルと云われるほどの侮辱はなかったのである。かくて後に「純正」アナキストと呼ばれる人達が現われた。しかしこれと対抗したアナルコ・サンヂカリストもボルだと呼ばれば、耐えがたい侮辱を感じて、退場さえ辞さなかったのである。

思想の純潔が未だ心情的発想である時は、誰にもアナルコ・サンヂカリストにもそれほど異議はなかった筈である。だが理論家が現われると、問題は硬化する。

このような状況のなかで、この会合が開かれた。それは黒色青年連盟の大会であったと云えるような会合であった。黒連には規約があったとは聞いていないから、大会だと断定するのは誤りかもしれないが、とにかく大会に匹敵する会合であった。もつとも大会という言葉からすぐ連想する規約に則った全体会議とか、最高

の意志決定機関という觀念からは遠いものだったとは思えるのであるが。

それは一月の中頃のことであった。その頃は早稲田の高等学院の学生だった。もちろん今の高校ではなく、旧制高校である。その日、帰ろうと思って校門を出ようとすると、其処で偶然、鈴木靖之に出会ったのである。彼は専門部の法科に籍をおいていた。彼は私を見ると肩まで届きそうな長髪をかきあげながら、陽焼けた顔をほころばした。

「やあ。しばらく会わなかったねえ。まあ少し話そうじゃないか」

彼は丸善の横の路次にある小さな喫茶店の方へ歩いて行つた。私たちは、というのは彼が同志と発行していた『黒線』という文芸雑誌に集まっていた人達のこと、それは緒方昇、有馬好雄、藤原秀雄、織田貫その他の諸君と私のことでもあったが、集会にはいつもこの喫茶店を利用していたのである。彼はいつも文字通り口角泡を飛ばして、大杉栄やブルードンやバクーニンやクロボトキンやスタイルネルを語り、マルクス、レーニンを攻撃し、時にはゲルツェン、ツルゲーネフ、ドストオエフスキーに及んだりして時の経つのを忘れる風であったが、その日は彼は席につくと、「今日、在京のアナキストの新年会があることになっているので、僕は其処へ出かけるところなのだ。もしよかつたら君も一諸に行つてみないか」と云つたのである。ほくも出席していいのかときくと、そりゃかまわないだろうと云つたので行くことにした。その頃は末だ私は鈴木等の他には、アナキストと云われている人達は誰一人も知らなかつたので、どんな人達だろうか、会つて見たいという好奇心も動いたのである。

鈴木が私を連れて行つたのは上野公園の参宣亭という貸席だった。この貸席は古くから続いているのだそうだが、当時は田戸正春が経営していた。彼はアナキストの文学者であった。玄関をはいる時、私は秘密の会合にでも出るような緊張を感じたが、出て来たのはやせた男だった。私達を見ると、「よく来た、まあ上れ」と無難作に云つた。冬だというのに、彼はよれよれの袴を素肌一枚着たきりであった。それに素足である。この寒いのに素袴で平気であるのに先づ驚ろいた。もっとも平気でいた訳でもあるまいが、のちに彼が川口麿介と知つた。居候の名人だということを教えてくれた者もいた。当時は参宣亭の居候だったのかもしれない。

川口麿介は、五・一五事件の後には、権藤成卿の居候になった。「雲の上から、地の底に至るまで世話を焼いてやらなくてはならぬので忙がしい」と冗談を云つていた。しかし何故、彼が右翼に走つたのかは、よく知らない。権藤の処に住み込ん

でも、彼はアナキストでなくなった訳でもなく、また右翼に転向して天皇主義者になつたとも思えなかつた。彼はアナキズムの理想とした農工合体の自由コミュニティから発想した農民自治主義的なアナキストであつたから、権藤の農民自治の思想に共鳴したのではなからうか。私は当時もはやされた権藤の『自治典範』を研究した訳ではなかつたから、正確なことは云えないが、神々の祭りを中心として自治的に結合していた農村共同体を、現代の農村に復活することが、農業の資本主義化によって困窮に陥入つた農村を復活させる道であること、結合の中心概念としての神々の祭りは、神々の直系と考えられている天皇に総てが導かれること、しかも東洋政治思想の王道の体現者としての天皇を幕府の霸道との対立のなかに認め、天皇政治は王道であると規定し、天皇に帰一することが農村再建の道であり、ひいては昭和維新の精神的な柱であると主張しているものと考へていた。川口は自由コミュニティが、国家権力を排除したなら、自治的農村共同体を基盤として実現し得ると考へたのであろう。それならば彼はこの共同体のなかに、アナキズムを、いやアナキズムの幻影を見たのであろうか。しかし現実の農村は、資本主義化の進行と共に変化し、自治的共同体は崩壊にひんしており、神々の祭りは結合の契機である力を失ない、祭司を支配した地主は資本主義と結びついていた。日本の祭司としての天皇は、大ブルジョアに転化し、絶対的権力の源泉と化していた。この現実を認めぬ復古主義こそ右翼思想の特質であることを、彼は見落していたのだから。「土着」を強調する思想が、常に復古性を包蔵して、發展的歴史観に反対することは、クロポトキンにさえ見られたのである。そして多くのアナキストが、バクーニンには見ることができた歴史的発展としてのアナキズムを排したり、忘れ去つたりしている。だから、彼が権藤に走つたのも理由のないことではなかつた、と私は考へる。

大広間にはいつて見ると、正面に前田淳一が坐つていた。彼が黒連の中心人物だから、正面に坐つてゐるのだらうと思つた。彼は周囲に、鷹樹寿之介、上田勉、藤尾兄弟、斎藤修三、山本義熊、北浦漠といった若い元氣なアナキストを集めていた。彼が集めたのではないだらうが、彼等は黒連の事務所に住み込んで、いつの間にか最年長の前淳を中心人物にして行動を共にするようになっていた。前淳は戦前既に脱落者になつたし、当時も批判は多かつたが青年をひきつける何かがあつたのであろう。彼の横に、石川三四郎が窮屈そうに洋服の膝を揃えて坐つていた。部屋の方の側には、黒連の若者たちがかたまつて並んでおり、他方の側も席がいっぱいなので、私たちは入口の近くに坐つた。鈴木がまた長髪をかきあげながら、「い

や、おそくなつて」と挨拶すると、前淳が「学連は君だけか？」と声をかけた。それはいかにも期待はづれのように見えた。

「みんな来ると云つてたが、どうしたか」と鈴木が云い訳のようなことを云つた。会には既にはじまっていたと見えて、誰かが喋っていた。聞いていると、当時激しさを増して来ていたサンチカリズムの問題であった。

「石川さんがサンチカリズムを認めるようなことを云つたり、書いたりするから、ボル化した連中がいい気になるのだ。あれはやめて欲しい」と前淳が云うのが聞えた。

「いや、僕はただ事実を事実として云っているだけなんだよ」と石川三四郎が云うのが聞えた。

石川三四郎は激しいサンチカリズム攻撃の声のなかに孤立しているように見えた。彼は黒連の人達を未だ説得できると思つて来たのかもしれない。しかしこの場の空気は、もう彼の説得を聞き入れるものではなかった。彼は間もなく、あきらめたのか、席をはずして帰つて行つた。

彼が帰ると、今度は攻撃の鋭先きが昨年十二月に結成した関東社会芸術家連盟(SAF)へ向いた。

この連盟は文芸解放社の提唱で結成したばかりだった。結成大会には私も出席したが、主唱者の壺井繁治と高橋勝之が、目的や組織や規約の説明をした。反対論も激しかったが、とにかく結成したのである。しかし結成すると忽ちボルの策動だという非難が出た。

攻撃の論旨は、組織は権力を生むという観点に立っていた。そして連盟の即時解散を求める声さえ出るのだから、岡本潤、萩原恭次郎などの連盟に加入している人達を悩ましていた。この攻撃には綿引邦農夫とか、大塚貞三郎などの全国自連の人達も同調していて、彼等は全国自連のなかにいるアナルコ・サンチカリストはみんなボルか、ボルの手先きだから放逐しなければならぬという主張に黒連の意志を統一しようとしているかのようだった。

やがてこの会合は、サンチカリズムを撲滅すべしという熱気に燃えて終つた。思想の純潔を守ることが、運動の出発点でなくてはならぬという意見が強調された。そして三月に予定されていた全国自連第二回統行大会では、綱領改正に反対する人達を追放しろという叫びが会場に溢れた。

黒色青年連盟は意志の統一に成功したかに見えた。しかしこのことが何を結果す

るかには気付いていなかった。日本の社会主義運動の少数派だったアナキズム運動は、「純正」アナキズムとアナルコ・サンチカリズムとに分裂することで、尚一層の少数派になってしまった。衰退の急坂をころげ落ちていったのである。そして黒色青年連盟もその機能をはたせなくなつて、「黒連」とは呼んでいるが、単なる小グループと化して行くのである。黒色青年連盟は、その後はこのようにグループや労働組合や芸術家のグループや学生のグループを集めた会合を遂に持つことはなかったし、また持つことが出来なくなつてしまふのである。それ故、私はこの会合を、黒色青年連盟の最後の「大会」であつたと云うのであつて、そう云つてもそれほど誤りではないと思ふのである。

間もなくSAFは解散した。そして壺井、高橋等が共産党に転向すると、「黒連」は自分達の行動が正しかつたという確信を深めることになつた。かくて「黒連」は殴打したことの合理化に成功した。殴打されたことが思想の変化を促がすこととはあり得るとしても。

全国自連では続行大会が、綱領改正を可決し、改正反対を主張した組合は、一斉に退場するという誤りを犯した。そして大会は、これらの組合を、直ちに除名するという誤りを犯した。このため「純正」アナキズムとアナルコ・サンチカリズムとは、アナキズムと共産主義との対立と同じような対立関係を作り出してしまつた。意見の相違を退場と除名によつて解決した後も全国自連は労働運動にとどまつていた。「黒連」も争議が起れば応援に駆けつけた。しかし賃上げや労働条件の改善という闘争は、あくまでも改良主義に過ぎないし、組合山賊論は正しいという考えは棄ててはいない。それ故次第に労働者の日常闘争に対しては消極的になつて行く。これは論理の帰結である。労働者の日常闘争と革命的闘争との間に、断絶を見る思想では、日常闘争を革命的闘争へと高める努力は否定され、時にはボルシェヴィキの方法として断罪された。次に来るものは一揆暴動主義への傾斜であることは見易い道理であつた。

アナルコ・サンチカリズムも暴力革命を承認することにおいては、「純正」アナキストと少しも異なつてはいなかつた、一揆暴動や行為の宣伝については、決して否定してはいなかつたのである。ただ純粹に一揆暴動主義のみに固執しなかつただけであつた。大正のテロリズムの伝統は強く生きていた。

けれどもテロリズム、行為の宣伝、そして一揆暴動は口に云うは易しいが、実行は死を賭す行為であるから、生易しいものではなかつた。「甘粕は三人殺して仮出獄、久さん未遂で無期懲役」と喝破した故山崎弁護士の名言は、当時の階級裁判の

実相を余すところなく暴露していたからであった。

テロリズムによる社会不安の醸成は、労働運動の浪が高まっているとか、政治的危機感が生れているとかという客観情勢の推移に乗じない場合は、その目的を遂げる訳にはゆかないが、このような意見はテロリストにとつては、テロリズムを實行しない第三者の安易な意見だと思ふほど、自己を極限の状況において考える極度に精神を緊張させている。これは誰にでも出来ることではない。彼は秘かに孤高を誇り、精神の不安を押える。個人の尊厳と、個人の主張というアナキズムは、彼に思想的な力を与える。

一九三〇年代の「純正」アナキストは、私を含めて、思想の純潔を極限まで追求し、理想社会における生活を、現実の生活に生かして、一切の妥協を排除しようとしたところに特質があった。彼等は、「何日でも、テロリズムに立ち上がる準備」がなくてはならないと考えた。賃銀制度の否定、貨幣経済の否定、法律無視、私有財産の否定など、理想社会の生活と思われる生活を、身を以て実行して生きようとした。こうした実践は、農工合体の自給自足のコミュニティを直ちに建設しようという意欲を生むと共に、たかり、乞食、強奪、窃盗の肯定となった。資金獲得のためブルジョアからの強奪としてはじまったリヤクは、いつか生活の手段と化した。乞食、強奪より安易だからだ。テロリズムへ向って精神を緊張させることは、計画がない時には、永続するものではない。かくて墮落が始まり、リヤクは賛助金集めが広告取りに転化した。それは直ちに脱落への道に通じていた。 ⅡつづくⅡ

## 編集後記

今号から、編集の担当者が僕に変わった。こんな小冊誌でも、費す労力は、不慣れのせいもあるだろうが、可成りのものだと思った。しかし、だからと言って甘えるわけにはいかない。不満や批判は遠慮なくどしどし送ってもらいたいと考える。無名戦士諸君、では。

## 乱 RAN 6号

1971年6月20日発行(月刊)

定価	80円(〒25円)
定期購読	6号分 500円(〒共)
編集者	『乱』編集委員会
発行者	秋山清
発行所	麦社

東京都豊島区南池袋1-15-21田中ビル207  
tel. (03)987-5765 振替東京 144722

# 全体革命への序説

一五〇円  
¥35円

大沢正道

「アナキズムの原理と原則」「プロレタリア  
独裁と連合主義」の二論文を収録。研究会テ  
キスト等に好適の入門書。

研究会等で十部以上まとめて申込みの場合、割引あり

# アナキストの文学

二四〇円  
¥45円

秋山清

「アナキストの文学とアナキズムの文学」、  
「アナキストの文学」、「昭和の詩人群」か  
らなる本書は多年にわたりアナキスト詩人と  
して活躍してきた著者の総括ともいえよう。

私の見た

# 日本アナキズム運動史

増補版

近藤憲二

八月刊行

予価三〇〇円(¥45円)

大杉の片腕として活躍した著者が体験をもつて語る日本アナキズム運動史。基本資料としても高く評価される。再版にあたり、新たに秋山清氏の解説を加えた。

クロンシュタットの反乱

独裁と革命

ペルクマン

残部僅少  
二〇〇円  
¥35円

ファブリ

残部僅少  
二〇〇円  
¥35円

麦社

東京都豊島区南池袋1—15—21 田中ビル207  
振替口座 東京 144722 tel (03) 987—5765

七十一号、八月刊行、近藤憲二、秋山清、大沢正道、アナキストの文学、全体革命への序説、日本アナキズム運動史、クロンシュタットの反乱、ペルクマン、ファブリ、独裁と革命、麦社